「シンセサイザーの教育実践への活用」

領域名：別科助産専攻

報告者：知念久美子

教育及び実践の課題

当科は1年間の助産師教育を行っており、入学して4ヶ月の間にほとんどの科目を履修するため、複数の科目が同時進行し、多重課題が生じる。そのような状況の中で、多くの学生が精神的困惑や情緒的消耗感に陥りやすく、これが学業継続や学習の目標達成に影響していた。そのため、学生のレジリエンス能力を育成し、情緒的消耗感レベルを下げる必要があると考えた。精神的困惑や情緒的消耗感の要因として、年齢の幅が広く、教育・社会背景が多様である事から来る「コミュニケーション能力の低下」と学生自身が1年間を乗り切るためのイメージ化が出来ていない事による「多重課題を成し遂げる困難さ」が挙げられた。

活用した論文の概要

精神的困難とレジリエンスは看護スタッフの情緒的消耗感レベルが関係していることが示された。情緒的消耗感の程度の高さは、患者に提供する介入の質の低下と同様に、看護師の行動の劣化を導く（Maslach et al 2001）。看護スタッフが職場環境で体験するかもしれない組織の不確かさを抑制し、あるいは削除することは重要である Lester（Saks et al 2007）。「不確かさ減少理論」によると不確かさは、情報を提供することによって減少させることができる。特に看護専門職のようなストレスの高い職場においては、チームに所属しているという感覚と安全やコミュニケーションは、心理的健康や仕事の満足度にとって非常に重要である（Meeusen et al 2010）。コミュニケーションや葛藤の解決における教育、特別なコース、そしてオリエンテーションや指導・助言(mentoring)を通して臨床的な配置における準備をすることは、役割のあいまいさや仕事に関連したストレスの削減に有効であろう。これは、コーピング戦略において発達途中である（情緒的消耗感をより被りやすい）看護学生にとって特に重要である。

教育及び実践への活用

当科ではコミュニケーション技術を取り入れた講義や演習がされていたが、アサーション的コミュニケーションの基礎知識が乏しいために学生間のコミュニケーションもうまくいっていないことがわかり、平成 29 年度の講義にはアサーション的コミュニケーションの基礎知識に関する講義を組んだ。また、学生自身が当科での1年間のプログラムを乗り切るためのイメージを図ることが重要であると考え、平成 29 年度からガイダンスの内容を変更した。まずガイダンス初日に自己決定して入学してきたことと学生生活を成し遂げる覚悟の確認を行い、自己の責任を意識づけた。さらに、チームの一員としての責任を果たすために、宿泊研修の中でグループワークを行い、自分との約束、学生同士の約束、学生と教員の約束を具体的に考えてもらい、学生自身とチームで1年間を乗りきるための方法を自己決定させた。その結果、学生としての過ごし方や役割を意識した行動を取ることができようになったことが同年度の修了時のアンケート結果でも明らかになった。平成 30 年度は、学生が常に自己の立ち位置を確認した上で責任を意識し、役割行動がとれるように、ポートフォリオを導入し、目標を見える化している。

参考文献

Guadalupe Manzano Garcia, Juan Carlos Ayala Calvo.（2011）. Emotional exhaustion of nursing staff :influence of emotional annoyance and resilience. International nursing Review, 59(1), 101-107.